

## 北海道におけるカワウとミヤマガラスの最近の生息状況

日本野鳥の会北海道ブロック協議会\*

〒072-0005 北海道美唄市東 4条北 2丁目6-1 藤巻裕蔵方

### はじめに

北海道でカワウ *Pharacrocorax carbo* とミヤマガラス *Corvus frugilegus* はまれな鳥で、「Irregular visitor」とされているが(日本鳥学会目録編集委員会 2000), 最近になってカワウは春から秋にかけて, ミヤマガラスは秋と春に観察されるようになってきており(藤巻 2000), これら 2種の生息状況が徐々に変化しているようである。ある地域の鳥類相を把握するうえで, 変化する生息状況をきちんと記録しておくことは非常に重要と考えられる。しかし, 一般に生息数が増加しはじめる前後の記録は少なく断片的で, 生息数の増加やそれともなう分布域の変化が明らかになっている例は少ない。そこで, これら 2種の北海道内の記録をできるだけ多く収集し, 現在までの生息状況を明らかにするため, 日本野鳥の会北海道ブロック協議会として北海道内14支部を対象にアンケート調査を実施した。これはその結果のまとめである。

### 調査方法

記録の収集はアンケート調査によった。調査項目は, 年月日, 観察地のメッシュコード, 地名, 環境, 個体数, 摘要である。この調査でもちいたメッシュは 5kmメッシュ, すなわち 1/25000の地形図を「田」字状に 4区分した大きさである。観察記録記入票とともに, 観察地のメッシュコードを明らかにできるように 1/200000の地形図に 5kmメッシュを記入した地図を配布した。

一般に分布図は当該の種が観察された場所だけが表示されるが, このような表示法では空白の部分が調査しても当該の種が観察されなかったのか, その場所が未調査なのかの区別が明らかではない。この報告ではその違いがわかるよう, 分布図には調査の有無も示した。しかし, 多くの支部で観察結果を記録する場合, 当該の種が観察されなかったというような記録の方法をとっていない。そのため, 探鳥会を実施した場所を「調査した」とみなし, 探鳥会でアンケート対象種が観察されなかった場合には「調査しても観察されなかった」とした。

記録の収集期限を2005年12月までとした。回答は北海道14支部のうち, 道南檜山, 室蘭, 札幌,

---

2007年 4月13日 受理

キーワード: カワウ, ミヤマガラス, 北海道, 分布, アンケート調査

\*本投稿規程には「団体名ではなく, 個人名で投稿する」とあるが, 本報告は日本野鳥の会北海道ブロックとしての活動の成果であるため, 執筆者を明記したうえで, 団体名において特別に受理した。

滝川、旭川、十勝、オホーツク各支部から得られた。このほか、磯清志、小西敢、佐藤ひろみ、篠原盛雄、花田行博、樋口孝城、諸橋淳・仁美、山内昇の各氏と北海道渡島支庁、七飯町から観察記録を提供していただいた。また、小杉(1995)、富川ほか(1995)、北山(1999)、樋口ほか(2000)、北海道野鳥愛護会広報部(2000)の記録ももちいた。

アンケートで集まった観察記録の中には、同じ場所で同じ月の間に同じ群れと思われるものを数日にわたって記録している例があったので、観察記録数の集計にあたっては、同じ場所、同月に複数の記録がある場合、これら複数の記録を「1記録」としてかぞえ、群れの大きさについては複数記録のうち最大個体数をもちいた。地域別の両種の記録状況をみるため、北海道を以下のようにカワウでは4地域、ミヤガラスでは5地域に区分した。すなわち、道南(渡島、檜山)、道央西部(後志、胆振西部)、道央東部(胆振東部、日高、石狩、空知、留萌南部、上川南部)、道北(留萌北部、上川北部、宗谷、網走西部)、道東(十勝、釧路、根室、網走東部)で、4地域の場合には道央を一つにまとめた。

なお、このアンケート調査は、2004年6月に音更町十勝川温泉で開催された日本野鳥の会北海道ブロック協議会総会で提案され、実施が決められたもので、藤巻裕蔵がアンケート調査結果をとりまとめ、この報告を執筆した。

## 結果および考察

### 1. カワウ

これまでの観察記録にもとづいてカワウの分布を図1に示す。観察記録は5kmメッシュ単位であるが、全体の記録数があまり多くないので、ここでは10kmメッシュ(1/25000の地形図に相当)で示した(以下のミヤマガラスでも同様)。観察記録はほぼ全域から得られているが、おもな地域は渡島半島南部、石狩平野から旭川にかけての石狩川沿い、名寄以北の天塩川沿い、十勝平野の十勝川沿い、オホーツク海沿岸部である。なお、これらの地域のうち、七飯町ジュンサイ沼と幌延町では繁殖コロニーがある(福田私信、北海道野鳥愛護会広報部2002)。

観察された場所の環境は、おもにダム湖を含む湖沼や川で、海に近い河口部がわずかにある。

最近の記録で古いものは、根室市別温根沼1974年4月4日と6月17日、根室市当賀川河口1974年10月15日である(高田・松尾1975)。その後の記録は1979、1982、1990、1991、1994、1995、1999～2005年にある。これらのうち、2000年までは記録がないか、または記録があっても年間1～2例と少なく、まれに観察される夏鳥といえる状況であったが、2001年以降には記録が増えてきた(表1)。地域別にみると、2000年までの記録は道南、道央、道東であったが、記録の増えてきた2001年以降は道北でも記録されるようになり、分布が南から北に向かって広がった様子がうかがえる。また、上記の幌延町では、2001年に約30羽の営巣がはじめて確認され、2002年には約300羽が4月中旬に



図 1. 北海道におけるカワウの分布. 円は10×10kmの方形区を示す.

●: 記録あり, ○: 観察したが, 記録なし, ・= 観察行なわれず.

Fig. 1. Distribution of Cormorant in Hokkaido. Circles show 10×10km quadrates.

● : occurrence, ○ : no sightings, ・ = no data.

表 1. カワウの地域別観察例数.

Table 1. Numbers of observations of Cormorant in differents areas of Hokkaido.

年 year	道南 Southern part	道央 Central part	道北 Northern part	道東 Eastern part
1974				2
1979		1		
1982	2			
1988				
1990				1
1991		2		
1994				1
1995				1
1999		1		
2000		2		
2001		2	1	1
2002	1	4	4	5
2003		6	1	5
2004	4	9	2	11
2005	4	1	8	18

表 2. カワウとミヤマガラスの月別観察例数.

Table 2. Numbers of observations of Cormorant and Rook in each month.

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
	Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	June	July	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.
Cormorant	1	0	6	14	12	8	7	16	17	10	7	2
Rook	33	50	67	20	4	0	0	0	2	11	13	24

飛来し、5月下旬からふ化、7月中旬から巣立ちはじめた(北海道野鳥愛護会広報部 2002). このようなカワウの観察記録の状況をみると、2002年以降北海道へは個体数は少ないものの恒常的に渡来するようになったといえる。観察される時期は、おもに3月中旬～11月上旬で、12月、1月の観察例はわずかで、2月の観察例は今のところない(表 2)。以上に述べたことから、カワウは北海道ではおもに3月中旬から11月上旬にかけて生息する夏鳥としてよいであろう。これは、北海道における冬の気温が低く、厳冬期には平均気温が $-8^{\circ}\text{C}$ 以下で(小疇ほか 1994)、主要な生息環境である湖沼が結氷することによるものと考えられる。

今までに記録された例では、一度にみられる個体数は1～10数羽で、大きな群れは少ないようである(表 3)。ただし、1999年4月に石狩川と篠津川の合流部で100羽近い群れが観察され、2000年4月から5月にかけてもほぼ同様の群れ(樋口ほか 2000)、前述のように幌延では300羽が観察されており(北海道野鳥愛護会広報部 2002)、今回のアンケートの結果でも名寄の天塩川で2005年7月22日に140羽、紋別コムケ沼で2005年9月に100羽近くが観察されている。

日本でカワウは1960年代以降次第に減少したが、1980年代には再び増加し始め、既存のコロニーが拡大し、そこから派生したコロニーや新コロニーも出現し、1990年代には日本各地で確認される繁殖コロニーが増えてきた(福田ら 2002, 環境省 2004)。全国的にカワウの分布が広がった理由として、本州各地における個体数の増加のほか、個体数の増えた地域における生息環境の破壊などの攪乱によりカワウが拡散が促進されたことも考えられている(環境省 2004)。北海道でカワウの観察例が増えはじめたのは前述のように2001年以降で、本州以南で繁殖コロニーが増えてきた年代を考慮すると、カワウが北海道にも定期的に飛来するようになったのはおもに生息数全体の増加の結果と考えられる。なお、大陸でも香港マイポにおけるように1990年代前半から2000年にかけてカワウが増加している例がある。しかし、中国のカワウは亜種 *Pharacrocorax carbo sinensis* であり(鄭 1976)、日本の亜種 *P. c. hanedae* とは別亜種であること、日本の亜種は日本以外では台湾、朝鮮半島、サハリンだけで記録されていること(日本鳥類目録編集委員会 2000)、今のところ大陸と日本との間でカワウが渡っている確実な証拠がないこと(山階鳥類研究所 2002)から、カワウの大陸における増加と日本における増加とは関係ないであろう。

## 2. ミヤマガラス

これまでの記録やアンケートの記録にもとづくと、北海道でミヤマガラスは、道南、道央のおもに石狩平野南部と勇払平野、十勝平野、網走地方東部、道北の宗谷や離島で観察されている(図 2)。記録収集を打ち切った2005年12月までは、空知地方や上川地方といった内陸部、道東の釧路地方と根室地方ではまだ観察記録がない(ただし、2006年 2月に釧路市音羽で15羽が観察された(北海道野鳥愛護会 2006))。

観察された場所の環境は、大部分が水田、畑、草地といった農耕地で、少数の例では農耕地に囲まれた林、市街地、海岸であった。

われわれが把握できた最初の記録は、1994年の道南、利尻島、礼文島におけるものである(小杉1995、富川ほか1995)。それ以降、毎年北海道各地で観察されるようになってきた。しかし、観察されるようになった年は地域によって異なり、1994年からの記録があるのは道南と道北で、道央西部では1997年から、道央東部と道東では1999年からで(表 3)、生息域が西から東に向かって広がった様子がうかがえる。この点は南から北に分布を広げたカワウの場合と異なっている。以上の記録から、北海道には1994年以降に渡来するようになり、その後東部にも飛来するようになったといえる。観察される時期は、9月中旬～5月上旬であるが、大部分は10月上旬～4月上旬に観察されており、5月と9月の記録は少なかった(表 2)。

観察記録のうち群れの大きさが記入されている例についてみると、群れの大きさは大部分が50羽



図 2. 北海道におけるミヤマガラスの分布. 凡例は図 1に同じ.

Fig. 2. Distribution of Rook in Hokkaido. Symbols were same as in Fig.1.

表 3. ミヤマガラスの地域別観察例数.

Table 3. Numbers of observation of Rook in different areas of Hokkaido.

年 year	道南 Southern part	道央 Central part	道北 Northern part	道東 Eastern part
1974				2
1979		1		
1982	2			
1988				
1990				1
1991		2		
1994				1
1995				1
1999		1		
2000		2		
2001		2	1	1
2002	1	4	4	5
2003		6	1	5
2004	4	9	2	11
2005	4	1	8	18

表 4. カワウとミヤマガラスの群れの大きさ別観察例数. ( )内の数値は割合(%)を示す.

Table 4. Numbers of observations of Cormorant and Rook in relation to group size. Figures in parentheses indicate percentage.

	群れの大きさ (Group size)					
	1	2~10	11~20	21~30	31~40	41~
Cormorant	23(29)	29(36)	11(14)	6(8)	3(4)	8(9)
Rook	1	2~50	51~100	100~200	201~300	400~
	13(6)	123(59)	22(11)	18(9)	20(10)	12(5)

以下であった(表 4).

ミヤマガラスは日本鳥類目録改訂 5版(日本鳥学会 1974)によると北海道に生息しておらず, 改訂 6版(日本鳥学会目録編集委員会 2000)になってまれに飛来するとされている. 具体的な時期については小杉(1995)や富川ほか(1995)の報告, 今回のアンケート調査で1994年以降であることが明らかになった. ミヤマガラスが北海道で記録されるようになる前からすでに東北地方では越冬するようになっており, これらがさらに北上するようになって, 北海道でも記録されるようになったと思われる. ただ, 道南で観察されるようになった年と同じ年に道北でも記録されていることから, 大陸から直接に, または北海道より北からのルートで渡来する可能性も否定できない. しかし, Nechaev(1991)は1971~1989年のうち17年間サハリン各地で調査をしたが, ミヤマガラスをまったく観察しておらず, 最近でもサハリンでミヤマガラスが観察されたような情報が得られていないので, 北からの渡来

ルートの可能性は低いと考えられる。

なお、ミヤマガラスの群れにコクマルガラス *Corvus dauuricus* が一緒にいる場合があった。その割合は全観察例数の12%で、混ざっているコクマルガラスの個体数は1～9羽であった。

### 今後の課題

今回のアンケート調査では北海道の広い範囲から観察記録を集めることができた。これは多くの支部の会員の協力によって初めて実現できることである。今後とも、鳥類やその生息環境の保護・保全のための調査・研究が各支部協力して進められるであろうが、いくつかの課題がある。

第一に、今後とも北海道におけるカワウとミヤマガラスの生息状況が変化することが予想されるので、その状況を把握するためには少なくとも5年に1回くらいの割合で今回と同様のアンケート調査を行なう必要があるであろう。現に、2005年12月の記録収集打ち切りまでミヤマガラスの記録のなかった釧路市で2006年になって記録された事実がある。

第二に観察網の整備の問題がある。図1, 2に2種の分布を示したが、渡島半島、後志地方、日高地方、留萌地方、上川地方、網走地方西部で観察空白の部分が多く見られる。各支部が探鳥会を行う場所はほぼ固定されているので、観察空白を少なくすることは困難と思われるが、分布に関する情報を集めるため、できるだけこれまで探鳥会を実施していない場所でも実施したり、独自の調査を行なうことが望まれる。

第三は観察記録のデータベース化とその共有化の問題である。各支部の探鳥会記録や個々の観察記録は支部報に記載されるので記録として残るが、それ以外の個人の記録は意識して残すようにしないと、せっかくの記録が無に帰してしまう。できれば支部段階でこれらの記録をデータベースとして残し、さらに各支部が互いにそのデータを利用できるようなシステムを作ることが必要と考える。この際、記録の仕方を統一しておく必要がある。その中でも特に重要なのが位置情報である。環境省の各種の報告書のように、最近では分布をメッシュ法で示すようになってきており、今回の報告でも同じ方法で分布を示した。今後は観察位置の記録事項として地名のほか、メッシュコードを明記する必要がある。例えば、コムケ湖、風連湖、濤沸湖などは、5kmメッシュの場合でも複数のメッシュにまたがり、地名だけではメッシュ法による分布図には資料として使えないのである。

### 謝辞

カワウとミヤマガラスの分布状況をまとめるにあたり、観察記録を提供していただいた磯清志、小西敢、佐藤ひろみ、篠原盛雄、花田行博、樋口孝城、諸橋淳・仁美、山内昇の各氏、北海道渡島支庁、七飯町にお礼申し上げる。

## 引用文献

- 鄭作新. 1976. 中国鳥類分布名録 第二版. 科学出版社, 北京.
- 藤巻裕蔵. 2000. 北海道鳥類目録改訂 2版. 帯広畜産大学野生動物管理学研究室, 帯広.
- 福田道雄・成末雅恵・加藤七枝. 2002. 日本におけるカワウの生息状況の変遷. 日本鳥学会誌 51: 4-11.
- 樋口孝城・広川淳子・新城久. 2000. 北海道におけるカワウの群れ. 北海道野鳥だより 120: 7.
- 北海道野鳥愛護会広報部. 2000. ミヤマガラスが北海道の冬鳥に. 北海道野鳥だより 121: 4-5.
- 北海道野鳥愛護会広報部. 2002. カワウ営巣・道内初確認. 北海道野鳥だより 129:12-13.
- 北海道野鳥愛護会広報部. 2006. 釧路市にミヤマガラス. 北海道野鳥だより 144:10.
- 北山政人. 1999. 野鳥記録二題. 北海道野鳥だより 115:10-11.
- 環境省. 2004. 特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編). 環境省, 東京.
- 小杉和樹. 1995. 利尻島におけるミヤマガラス *Corvus frugilegus* の記録. 利尻研究 14: 5-6.
- Nechaev, V.A. 1991. Birds of Sakhalin Island. Institute of Biology and Pedology, Vladivostok. (In Russian).
- 日本鳥学会. 1974. 日本鳥類目録改訂第 5版. 学習研究社, 東京.
- 日本鳥学会目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録改訂第 6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 高田勝・松尾武芳. 1975. 根室管内観察鳥類リスト. 根室自然保護教育研究会49年集録: 25-43.
- 富川徹・小畑淳毅・福岡将之. 1995. 礼文島における春季(1994)の鳥類相. 利尻研究 14: 11-16.
- 小疇尚・福田正巳・石城謙吉・酒井昭・佐久間敏雄・菊池勝弘. 1994. 日本の自然 地域編 北海道. 岩波書店, 東京.
- 山階鳥類研究所. 2002. 鳥類アトラス 鳥類回収記録解析報告書(1961年～1995年). 山階鳥類研究所, 我孫子.



Recent Distribution of *Cormorant Phalacrocorax carbo* and Rook *Corvus frugilegus*  
in Hokkaido, northern Japan

Hokkaido-Block Council of Wild Bird Society of Japan  
c/o Y. Fujimaki, Higashi 4, Kita 2-6-1, Bibai 072-0005 Japan

A questionnaire on the recent distributions of Cormorant *Phalacrocorax carbo* and Rook *Corvus frugilegus* was sent to 14 Hokkaido branches of the Wild Bird Society of Japan.

Cormorants were observed mainly on lakes and along rivers from mid-March to early November in Hokkaido. The number of observation records has increased since 2001 and the distribution has expanded from the southern part to the northern part of Hokkaido. Most flocks consisted of fewer than 20 birds, but a few included 100 to 300 birds.

Rooks were observed in agricultural areas from early October to early April. They have been recorded since 1994 and the distribution has expanded from the western part to the eastern part. The flock sizes were generally fewer than 50 birds, but rarely up to 700 birds.

*Key words : Cormorant, Rook, Hokkaido, distribution, questionnaire*

